

# 神と霊界への信仰

## 統一教会における合同結婚式参加者たちの 結婚生活

中西 尋子\*

### 要 旨

本稿は、統一教会（世界基督教統一神霊協会）の合同結婚式で韓国男性と結婚し、韓国農村部に暮らす日本人女性たちへの聞き取り調査をもとに、なぜ彼女たちが合同結婚式を受け入れ、韓国での結婚生活を継続できるかを明らかにする。聞き取りによれば、彼女たちは、かつては宗教嫌い、無関心だったけれども、神や霊界といったスピリチュアルなものへ関心をもっていたことがわかる。宗教嫌い、無関心であった彼女たちが統一教会に入信したのは、統一教会が説く「神」や「霊界」の考え方、実践に共感を覚えたからである。統一教会の教えに共感し、内面化すれば、彼女たちは統一教会の世界観の中に生き、教えに従った行動をとる。統一教会の目標であり、信者にとっての理想は、「神の子」を生み、この世に神の「創造目的」にかなう「地上天国」を実現すること、罪を清算し、死後は霊界の「天上天国」で永遠に生きることである。韓国男性と結婚し、子どもを生み育てることは「地上天国」の実現に必要とされ、夫や夫の家族に尽くし「為に生きる」ことは、罪の清算と意識される。統一教会に入信し、合同結婚式を受け入れ、結婚生活を続けているのは、統一教会の教えと実践に彼女たちのスピリチュアリティを満たすものがあったからである。

キーワード：神、霊界、スピリチュアリティ、統一教会

\* 関西学院大学

## 1 はじめに

統一教会（世界基督教統一神霊協会）は、信者が集団で結婚式を挙げる「合同結婚式」で知られている。結婚相手は教祖によって選ばれ、信者はどこの誰ともわからない相手と、交際期間も恋愛感情もないまま結婚することになる。そのような結婚は成り立つわけがなく、すぐに破綻すると思うのだが、家庭を築き結婚生活を続けている信者がいることも事実である。筆者は数年前、韓国農村部を訪れた時に合同結婚式で結婚したという日本人女性に偶然出会った<sup>1)</sup>。それ以来、なぜ日本人女性が合同結婚式を受け入れ、韓国での結婚生活を続けることができるのかという疑問をもって聞き取り調査を続けている。

統一教会をはじめとする「カルト」と称される宗教集団への入信は、マインド・コントロール論でもって説明されることが多い。これは入信を本人の意志ではなく、自分で正しく判断する機会を奪われ、入信するように仕向けられた結果とみる考え方である。この考え方を否定するつもりはないが、合同結婚式で結婚したと語る本人を目の前に思ったことは、「マインド・コントロールの一言ではとらえきれない何かがある」ということである。筆者が調査している場所は一地域にしかすぎないが、韓国全体では、合同結婚式で結婚、渡韓した日本人女性は、教団関係者の言葉によれば7千人に達するという<sup>2)</sup>。7千人にもものぼる日本人女性が、マインド・コントロールされただけで韓国に住み続けるのだろうかという疑問がぬぐいきれない。

合同結婚式を受け入れ、結婚生活を継続しているのはなぜかという筆者の問題関心は、従来、宗教社会学が扱ってきた入信あるいは入信過程への問いに通じるものである。その点では、ここで扱おうとする問題は新しいものではない。従来と違う新しさをあげるとすれば、調査対象が統一教会の「現役信者」という点にある。これまでの統一教会研究をみると、日本では脱会した元信者や反統一教会の立場にある団体などから得られた資料やデータに基づくものがほとんどである〔櫻井, 2002a, 2003a, 2003b〕<sup>3)</sup>。欧米では、現役信者の調査研究はあるもののフィールドは自国における統一教会である。社

会問題としてある日本の統一教会の特殊性は、欧米の調査研究からは見えてこない[櫻井, 2003a: 47-48]。ここで取り上げるような合同結婚式で結婚し、渡韓した現役信者についての調査は、海外を含め見当たらない。現役信者を調査すると従来とは違った視点から入信をとらえることができる。ややもすれば「カルト」を擁護しかねない危険性を含むが、マインド・コントロール論ではとらえきれない入信の背景を探ることができる。

日本人女性たちが合同結婚式を受け入れ、韓国での生活を続けている理由について、これまで調査した限りでいえることは、統一教会は生きる目的や女性であることの意味を彼女たちに明確に与えたという点である。それが生きる目的を模索していたり、女性であることに利点を見出せなかったりしていた女性たちに受け入れられ、彼女たちは統一教会の教えに従う生き方を選択したと考えられる[中西, 2004, 2006]。もちろん他にも要因はあるだろう。多くの要因が絡み合っ、彼女たちは韓国での暮らしを選び取っている。

そこで本稿では、筆者が聞き取りをしていて意外に感じたことを糸口に、もう一つの要因を考えてみたい。意外に感じたこととは、何人もが「宗教は嫌いだった」と語っている点である。「宗教臭いこと嫌い」、「宗教大嫌いだった」、あるいは「宗教観まったくなかった。(家に)仏壇はあったが、宗教のシュの字も知らなかった」と、かつて宗教とは全く無縁だった様子を語る人もいた。次のように語ってくれた人もいる。

本部教会員になるための試験がある。ここの正式名称を答えなさいという問題がある。(答えは)「世界基督教統一神霊協会」。「統一教会」(という語)がない。(世界基督教の部分を)「せかいきとくきょう」と読む。「これをキリスト教と読むのよ」と教えられ、この時ショックだった。キリスト教には棺桶に片足をつっこんでいる人がいくものと思っていた。ここがキリスト教だったんですかー(と驚いた)。(Sさん、1969年生まれ)

S はもともと漢字の読みには自信があり、「きとくきょう」と読んだが「キリスト教」と訂正され、「キリスト教」であることを知った。統一教会をキリスト教とするかどうかはともかく、S は統一教会を宗教と思わずに関わっていたことがわかる。関わりながらも宗教ととらえていなかった S にとって、やはり宗教は無縁のものであった。

現在、彼女たちは統一教会の現役信者である。しかも合同結婚式で結婚し、韓国農村に暮らしている。「筋金入りの」信者といいたいくらいである。しかし、かつては宗教嫌い、宗教とは無縁の生活だった<sup>4)</sup>。なぜ、宗教嫌い、宗教に無関心だった女性が統一教会に入信し、合同結婚式を受け入れ、韓国で暮らすまでになったのだろうか。この疑問を解く手がかりが「スピリチュアリティ」ではないかと思う。

伊藤は、現代社会に「宗教」は嫌いでも「スピリチュアリティ」には興味をもつ人々が増加していることを指摘している〔伊藤, 2003 : 153〕また、伊藤のスピリチュアリティの定義をみると、「神、宇宙、大自然、祖国、先祖、特別な人間などと自己とがつながる」感覚をさしている〔伊藤, 2003 : 130〕実際、日本人女性たちに聞き取りをしていると、語りの中に「神」、「霊界」、「先祖」がしばしば登場する。何か良いできごとがあると「霊界が協助している」、「先祖の功労がある」というフレーズがよく用いられる<sup>5)</sup>。彼女たちは「霊界」や「先祖」とのつながりをつねに感じていることがわかる。おそらく、この感覚のかなりの部分は統一教会の教えを内面化した結果であろうが、語りをみると入信前からある程度「スピリチュアル」なものに関心をもっていた点も指摘できる。統一教会に入信する前、彼女たちもスピリチュアリティに関心を向ける一群の一人だったのではないかと思えてくる。宗教嫌い、無関心でありながら、神や霊界に漠然と関心をもっていた女性たちが、統一教会が説く「神」や「霊界」、「先祖」の考え方や実践に共感を覚えた。そして入信し、合同結婚式を受け入れ、韓国での結婚生活を続けていると考えられないだろうか。

この点を明らかにするために、まず統一教会の「神」や「霊界」、「先祖」についての考え方を簡単に述べ、次に彼女たちの語りをたどりながら、統一

教会の教えのうえに築かれた結婚生活がどのように成り立っているかを探る。それによって宗教嫌い、無関心を乗り越えさせ入信に至らしめ、合同結婚式を受け入れ、韓国での暮らしを続けさせているもう一つの要因もみえてくる。

本稿で用いる日本人女性たちの語りについて少し述べておきたい。彼女たちの語りには、統一教会や自分の選択を否定するような内容は出てこない。語られる経験は「再構成された過去」である。信者である現在を肯定的に語り、信者でなかった過去を無意識のうちに否定的に語るということがないとも言い切れない。彼女たちの語りから、当時の「思い」だけでなく「事実」も取り出すように努めるが、語りはあくまで彼女たちの主観的現実である。データとして彼女たちの語りをそのまま用いるが、内容の如何にかかわらず、本稿は統一教会や合同結婚式を肯定するつもりはない。統一教会の「反社会性」は、筆者も十分認識している。認識しつつ、日本人女性たちが合同結婚式を受け入れ、韓国農村部での暮らしを続けているのはなぜかを少しでも明らかにしようとするものである。

## 2 統一教会が説く「神」、「霊界」、「先祖」

統一教会は1954年に文鮮明によってソウルで設立された。日本では1964年に宗教法人となった。教えの拠りどころは『原理講論』である。その内容は聖書を引用しつつも、儒教や韓国の巫俗的要素を取り込んだような独自の解釈から成り立つ。統一教会は、「神」を「あらゆる存在の創造主として、時間と空間を超越して、永遠に自存する絶対者」[世界基督教統一神霊協会, 1993: 50]ととらえる。韓国語でいえば「ハナニム」であり、キリスト教会が説く神と区別はしていない。異なる点は、人間の墮落を悲しんでいる「悲しみの神」ととらえる点である。人類の始祖をアダムとエバとする点はキリスト教と変わらないが、エバが蛇(サタン)の誘惑により墮落し、その後、アダムと夫婦になったことで人類にサタンの血統が受け継がれ、この世はサタンが支配する世になったと説く。サタンが支配する世は、「神」の

「創造目的」を逸脱した世であり、この状態を「神」が悲しんでいるととらえる。

「霊界」は、死んだ人間の「霊人体」(靈魂)が行く場所である。霊界は永遠の世界であり、天国と地獄がある。霊人体が天国に行くか地獄に行くかは「神が定めるのではなく、霊人体自身が決定する」。なぜなら「肉身の善行と悪行に従って、霊人体も善化あるいは悪化する」[世界基督教統一神霊協会, 1993: 85-88]と考えるからである。この世で正しい行いをした人間は死後、霊界の天国に行き、永遠のしあわせを手に入れるとされる。

「先祖」は、霊界で暮らしていると考える。先祖が霊界の天国で平安に暮らしていたら、この世の子孫の暮らしも平安である。もし、病気や事故といった災難があれば、それは先祖が、霊界でつらい状態にあることを知らせる信号である。その信号に気づき、子孫が献金をして供養をすることで先祖の苦しみは取り除かれ、子孫の暮らしも安定すると考える [統一思想研究院, 1998: 50-52]

信仰の柱は神と霊界である。この世においては「悲しみの神」を「喜びの神」に変えること、あの世の霊界においては永遠のしあわせを得ることが信者の目標となる。この目標のうえに日本人女性たちの韓国暮らしがある。

### 3 事例 日本人女性たちの日常生活

#### 3.1 A 郡在住の日本人女性たち

筆者の調査地は、韓国農村部の A 郡である。ここに 30 人ほどの日本人女性が暮らしている。郡の中心である A 邑に統一教会の「A 家族教会」があり、日曜や水曜の礼拝時には日本人女性たちが集まる。A 郡ではこれまでに 24 人に聞き取りを行った<sup>6)</sup>。

24 人の生年は、年長者で 1950 年生まれ、若い人は 78 年生まれであるが、4 分の 3 が 60 年代生まれである。入信の経緯に大きな違いはない。ほとんどが社会人として働いていた時に誘われ、やがて「献身」<sup>7)</sup>。布教、経済活動に一定期間従事した後に合同結婚式に参加。結婚後の「聖別期間」を

経て渡韓し、夫と同居を開始して現在に至っている<sup>8)</sup>。日本人女性たちの夫の多くは、結婚相手を求めて統一教会にかかわっただけである。信仰をもたないか、もっていたとしても熱心ではない。農村部では、統一教会が結婚相手の紹介を通して伝道を行っている。この点は彼女たちも認識している。

合同結婚式で結婚したとはいえ、筆者が接している日本人女性たちは、誰の周囲にでもいそうな真面目で純粋な女性たちである。ただ「善人が殺され、悪人がいい思いをしている。清い心の人が貧乏している」、「人が死んだらどうなるのか」といった疑問を以前からもっていた。この点からいえば、ある種の世界観を求める傾向はあったといえるかもしれない。

### 3.2 入信前からの神や霊界への関心

彼女たちが宗教嫌い、宗教とはおよそ無縁の生活を送っていたことは、先述の通りである。彼女たちが入信前から神や霊界に関心をもっていたことは、次の語りからうかがえる。

「神様(と)もいつも言っていた、祈っていた。信仰はなかったが神には祈る。……真実のものに会いたいです、と。(Hさん、1968年生まれ)

天使に名前をつけて、日記を、友だちと交換日記していた。中学では(中学生の時は)神様宛に日記を書いた。1日を報告、1日こうでした、ああしてください、こうしてください(と)。(Sさん)

6歳のときから、霊界のことを考えた。大人になって、おばあさんになって、いずれ死ぬ。幼稚園の帰りに(死んだら)「霊界に行くんだな」と毎日泣いていた。家の近所の木の塀をたどりながら。成人してからも死が恐怖だった。……誰に聞いていいかわからない、誰に聞くこともできない。自分の胸にしまっておいた。(Aさん、1956年生まれ)

「信仰はなかったが神には祈る」、天使や神、霊界についての語りから、彼

女たちは、入信前からスピリチュアルなものに関心を向けていたことがうかがわれる。入信前に自己啓発セミナーの iBD<sup>9)</sup>に通っていたという語りもある。

iBD という自己啓発に通った。……愛というものがどういうものかを知るために、自己啓発に入った。自分を愛するようになると考える（考えて）、それが自己啓発に入った動機。……内容は、原理も自己啓発も自分を見つめ、自分に気づかせるもの。自分の行動、持っているものに気づかせる。それを許す、能力を出す。宗教でいえば悟り。共通する点はたくさんある。（C さん、1962 年生まれ）

C の場合、入信前について語る語りの中に神や霊界は出てこない。けれども自己啓発セミナーに通っていたという点において、C もまたスピリチュアルなものに関心を向ける一人だったといえないだろうか。もう一つ、C の語りに注意したい点がある。統一教会の「原理」と自己啓発に「共通する点はたくさんある」と語っている点である。C が統一教会に求めたものは、宗教の要素ではなく、自己啓発セミナーの要素だった。

他の日本人女性たちも、宗教を求めて統一教会に関わったのではない。事実、彼女たちが統一教会に勧誘された時、統一教会とも宗教とも明かされなかった。「教養、宗教、世界平和、結婚、手相などの勉強」をするサークル、自己啓発セミナー、占いをしてくれるところ等と聞いたから通い始めたのである<sup>10)</sup>。最初から宗教とわかっていたら行かなかった。「最初から統一教会と言われていたら、絶対に行かない」という語りや、「宗教なんだ一、知らなかった一、失敗した一」と、統一教会と明かされた時の気持ちを語ってくれた言葉がある。彼女たちは、宗教を求めて統一教会に関わったのではないということは明らかである。

では、なぜ宗教嫌い、無関心であった彼女たちが、宗教とわかった時点でやめなかったのか。おそらく、統一教会の「神」、「霊界」、「先祖」の考え方や実践が彼女たちのスピリチュアリティを満たすものだったからである。彼



女たちの漠然とした神や霊界、先祖の知識を整理し、体系づけてくれたのである。この点において彼女たちは、統一教会を嫌っていた宗教と同列にはみななかった。同列にみななかったから、宗教とわかってても脱会しなかったのである。

### 3.3 罪の清算としての結婚生活

統一教会の先祖や霊界についての考え方は、「善人が殺され、悪人がいい思いをしている。清い心の人が貧乏している」、「人が死んだらどうなるのか」といった疑問に答えることができる。統一教会によれば、人間にふりかかる病気や事故といった災難は、すべて霊界で苦しむ先祖からの信号であり、人間は死ぬと「霊人体」が霊界に行く。このような説明は、彼女たちを納得させるものであった。統一教会の教えに納得し、教えを内面化すれば、彼女たちは統一教会の世界観の中に生きることになる。彼女たちが合同結婚式を受け入れ、韓国での暮らしを続けていけるのは、統一教会の世界観を内面化することによって可能になったのである。以下では、その世界観の上に築かれた結婚生活について記述する。彼女たちのスピリチュアリティを満す生活がみえてくるはずである。

統一教会によれば、「元来、人間は地上天国で生活して、肉体を脱ぐと同時に、霊界で自動的に天上天国の生活をするように創造されている」[世界基督教統一神霊協会, 1993: 69]と説く。霊界の「天上天国」で暮らすには、この世で霊人体を「善化」しなければならない。霊人体の「善化」は、「肉身生活の贖罪によってのみなされる」[同, 1993: 87-88]。贖罪とは統一教会が説く4つの罪、原罪、遺伝罪、連帯罪、自犯罪の清算である。原罪はアダム、エバの墮落によって人類すべてが受け継いでいる罪、遺伝罪は祖先が犯した罪、連帯罪は国家や民族などが犯した罪、自犯罪は自分が犯した罪である[同, 1993: 121]。原罪は合同結婚式で結婚することによって清算されるという。残りの3つ、遺伝罪、連帯罪、自犯罪の清算は、この世における善行の積み重ねが必要である。以下のような語りがある。

(この世は)天国に行くための訓練所。生活を通して人格を完成し、天国に合格するため。そうでないと(統一教会の教えによらない生活は)苦勞が苦勞で終わる。教会(統一教会)、み言葉を知って、苦勞はいつか報われる。(Bさん、1960年生まれ)

ここで語られている「天国」は、霊界の「天上天国」である。統一教会の教えを内面化した彼女たちにとって、この世は罪を清算する場、「訓練所」として意識される。苦勞があっても、それは霊界に行くために必要な訓練であるから「いつか報われる」ものとしてとらえられている。

実際に、韓国での生活は、言葉や生活習慣、食生活が異なる。それだけでも苦勞である。さらに彼女たちの場合、見ず知らずの韓国人男性と、愛情、信頼関係を築く時間も無く結婚し、生活を始めるわけである。さらに付け加えるなら、日本と韓国の歴史的関係がある。日本は韓国を36年間にわたり植民地支配し、民族の尊厳を奪った。その歴史的な事実は消えることなく、歴史教科書、靖国参拝などの問題をはじめとして、ことあるごとに想起される。統一教会が説くところによれば、日本と韓国は今なお「怨讐」関係にある。恨まれる側の日本の女性が、恨む側にある韓国の男性の妻になる。夫は頼りになるとは限らず、夫の父母やきょうだいと同居になれば、気苦勞はなおさらである。植民地支配の責任は、彼女たちにはないけれども、支配した国の人間であることに違いない。日韓関係が問題になれば、家族の中で孤立しないとも限らない。それを思うと、彼女たちの苦勞は、言葉や生活習慣を乗り越えるだけでは終わらない。それでも彼女たちが韓国での生活を続けているのは、遺伝罪、連帯罪、自犯罪の清算が念頭にあるからである。

日本が朝鮮半島を植民地支配したことは、連帯罪として日本人すべてが背負っているとされる。彼女たちの連帯罪は、夫や夫の家族に尽くすことによって清算されるという。この点を彼女たちは明確に意識している。

(韓国に)嫁に来るのは、恨みを解くため。嫁にあって、いい嫁になって、日本の嫁はいい嫁だ、日本人はいい人だというようになってい

く。(Pさん、1978年生まれ)

(夫が家事に文句を言ったり、人前で妻の悪口を言ったりすることに  
対して)むかつくが、日本が犯してきた罪、先祖が韓国人に言ってきた  
のかなーと、罪滅ぼしで来ているんだろうな、と思って(我慢してい  
る)。(Nさん、1972年生まれ)

「恨みを解くため」、「罪滅ぼし」の言葉から、P、Nともにはっきりと贖罪の意識をもっていることがわかる。Nは熊本出身である。韓国人との結婚を希望したのかどうかを尋ねると、以下のように答えてくれた。結婚前から連帯罪の清算を意識していたことがわかる。おそらく統一教会での学習を通してのことであろうが、加藤清正の朝鮮出兵まで関連づけていることに驚かされる。

熊本は加藤清正を祀る<sup>11)</sup>。朝鮮出兵をして、そこから日韓の怨讐関係は始まっている。熊本は恨みが深い。炭坑、荒尾炭坑があって、朝鮮人の強制連行をして働かせた。韓日(韓国人男性と日本人女性の結婚)が文先生(教祖)の願いだったら、それがいいと思った。(Nさん)

罪の清算のためとはいえ、贖罪を意識し、夫や夫の家族に尽くすという生活は、気詰まりしそうな生活である。P、Nの語りだけで判断すると、見下され、言いたいことも言えない、耐え忍ぶだけの生活をしているように思える。確かに大変な生活を送っている人はいるようである<sup>12)</sup>。ただ筆者が接している日本人女性たちに限って言えば、経済的に楽とはいえませんが、耐え忍ぶ生活をしているようには見えない。教会に集まると、彼女たちは「うちのシオモニが」、「うちの主体者が」と、姑や夫の話をして楽しそうに笑っている<sup>13)</sup>。Pも夫と些細なことで喧嘩をすることはあるようだが、つらい生活をしているようには見えなかった。夫は以前、仕事がない時は家で寝ていたが、子どもが生まれて「180度変わった」「仕事ばりばりやるようになった

た」という。「朝5時から、夜8時、9時まで」夫が一人で農作業をするとPは語っている。Nも夫と暮らし始めた当初「葛藤しながら暮らしている」と語っていたが、その後、関係は改善されたようである。筆者が家にお邪魔してNに聞き取りをしている時、夕方になってNの夫が帰宅した。氣遣ってくれたのか、着替えるとすぐに子どもを連れて散歩に出かけた。本来であれば、筆者が辞すべきところであるが、Nは「いいの、いいの」と夫に遠慮する様子もなかった。おそらく本当にどうしようもなく大変な状況にある人は、筆者のような調査者の前に姿を現す余裕はないと思う<sup>14</sup>。

遺伝罪、自犯罪は、「為に生きる」ことによって清算される。「為に生きる」とは「相手のために生きる、自分を顧みずに相手に尽くす」という意味である。統一教会では、「自分のために生きた人は地獄に行くのであり、人のために生きた人は天国に行くのです」と教える〔世界基督教統一神霊協会、1998：115〕。自分のことを犠牲にしてでも、他者のために尽くすという態度が求められる。次の語りは、9月とはいえまだ厳しい日差しのもと、教会の庭でBが一人で草むしりをしながら語ってくれた言葉である。

（人間は）宇宙の中で一つの動物に過ぎない。（でも）神を知って死ぬことが（ただ）死ぬことでない。（霊界に行くための）準備で忙しい。草むしりしていても、ご飯を食べていても、外的には同じようにしていても、天からみたら違う。価値は天が知っている。願いをかなえてくれる子は、親がかわいいのと同じ（ように神もかわいく思う）。（Bさん）

炎天下に一人草むしりをするBの行為は、「為に生きる」の実践である。Bは、「草むしりをしていても楽しい」と語る。神がちゃんと見ているという確信に裏づけられているからである。

この他にも教会の雑多な用事は、すべて日本人女性たちが行っている。土曜日の礼拝堂の掃除、「週報」の作成、日曜日の昼食の準備と片付け、教会の留守番、「任地」に來た信者の世話<sup>15</sup>などさまざまである。韓国人の信者が日本人女性たちに雑用を押しつけているのではない。高齢であったり、仕

事をもっていたりしてできないために、若くて時間的余裕がある日本人女性たちが行うのである。彼女たちの働きは、すべて遺伝罪、自犯罪を清算するための「為に生きる」の実践である。

### 3.4 「地上天国」実現のための家庭生活

統一教会による神についての考え方も、彼女たちの神へ想いを明確にした。彼女たちにとって「悲しみの神」は確かに存在する。その神が望むことは、この世に神の支配を回復すること、「地上天国」の実現である。彼女たちの韓国での生活は、罪の清算であると同時に「地上天国」建設のためである。「地上天国」の実現によって「悲しみの神」も「喜びの神」へと変わる。

「地上天国」は理想世界であり、国境、民族、宗教が垣根を越えてひとつになった平和な世界、神の創造目的にかなった世界とされる。「地上天国」の実現は、「神の子」が生み殖えることによって可能になるとされる。「神の子」を生むために合同結婚式が必要となる。この結婚によって、男女はアダム、エバから受け継いだ原罪を清算し、教祖から「神の血統」を受け継ぐ。生まれる子どもは無原罪の「神の子」とされる。国境、民族、宗教の垣根を越えることが理想であるから、国際結婚が奨励される。特に歴史的に不幸な関係にあった国、民族同士の結婚ほど価値がおかれる。その意味において日本と韓国の組み合わせは、最も理想的なカップルとなる。以下のような語りがある。

生まれた子どもには国境がない。すばらしいことだと思う。ここで言われていることは理想的だな、と思った。実現されたらすばらしい。希望、理想があって（目指して）到達するものがあるから、力がわく。その一部を（実践している）、子どもを育てていくことが理想。普通に結婚して育てているけど、普通のことだけど、変わらないけど、心情的には違う。（Jさん、1969年生まれ）

韓国、国際（結婚）の子は、国の壁を越えているから、それだけ何て

いうのかな、それだけ情が違う。私もそうだし、主体者（夫）もそうだし。霊界のご先祖様から見れば、恨（ハン）を越えた、ただ単に好き嫌いを越えた、怨讐を越えているから、深みが違うというか。……恋愛で結婚したのとは、わけが違うような気がする。そういう意味合いで頑張っているんじゃないかなーと思うんですね。（Nさん）

いずれも国境を越えるという点に価値を見出していることがわかる。一見、普通の国際結婚であるが、彼女たちにとって、その日常は単なる家事育児の日常ではない。「地上天国」の担い手「神の子」を生み育てるという宗教実践である。

とはいえ「地上天国」の実現は夢物語に近い。「いくら私たちが頑張っても、すぐには天国はできませんよ」（Bさん）「地上天国は雲をつかむようなもの」（Jさん）という語りがある。日本人女性たちも自覚している。しかし、たとえ「地上天国」の実現を自分の目で確かめることはできなくとも、生活の中で「手応え」を感じることはできる。韓国人の夫をもち、両国の血を引く子どもを生み育てているわけである。この点で、すでに家庭の中で国境、民族の壁を越えている。それは、彼女たちにとって「地上天国」への確かな一歩と感じられるであろうし、家庭がささやかな「地上天国」にもなり得る。「地上天国」の実現が夢物語に近いとしても、「手応え」を感じることができる限り、彼女たちにとって韓国での結婚生活は意味あるものとなる。

## 4 韓国の暮らしに根づくスピリチュアリティ

### 4.1 韓国における統一教会

韓国の主流派キリスト教会にとって、統一教会は数ある異端の一つである<sup>16)</sup>。韓国で出版されている何冊もの異端関連の書物には、統一教会の名前が必ずといっていいほどあがっている。異端の中で最も目立つ存在ではある。「似而非宗教」（偽宗教）との表現もみられるので、異端とする一方で宗

教でないとの認識もある。実際、統一教会は宗教活動の他に、学校、舞踏団、新聞、食品、建設、観光、自動車、リゾート開発などさまざまな領域で活動を行っている。

韓国にも反統一教会の動きがないわけではない<sup>17)</sup>。「韓国基督教統一教会対策協議会」という「反統一教会」を掲げる団体があり、新聞に「文鮮明統一教集団 糾弾声明書」や「統一教関連の団体および企業体」を載せている<sup>18)</sup>。しかし、「霊感商法」は、韓国では行われておらず、韓国の新聞（朝鮮日報）を調べてみても、「青春を返せ裁判」、婚姻無効の確認や合同結婚式への参加強要を訴えた裁判など、日本にみられるような訴訟の記事は見当たらない。その点において、統一教会を異端あるいは偽宗教としながらも、日本におけるほど「反社会的集団」とする認識は、韓国社会に共有されていないのではないかというのが筆者の印象である。第一に、「反社会的集団」という認識が広くあれば、信者の日本人女性を妻にしたりしないはずである。

#### 4.2 身近な存在としてある神、霊界

日本人女性たちが統一教会の信仰をもっているにもかかわらず、日常生活において宗教的緊張関係をもたらすことはない。もちろん家事育児を放り出して教会活動に熱中すれば、ただちに家庭不和になりかねないが、彼女たちは日曜、水曜の礼拝に出席し、当番で雑多な用事をする程度である。

神や霊界の観念という点においても衝突は起らない。韓国にはキリスト教が日本よりも広く根づき、教会は都市、農村にかかわらず至る所にみられる。もともと神の存在を信じる人が多い。「イサクトースト」<sup>19)</sup>、「エデンスーパー」といった名前の店もある。キリスト教的要素が日常に溶け込んでいる。霊界や先祖についても統一教会が説くまでもなく、巫俗儀礼や祖先祭祀にみるように、もともと身近に存在する。日本人女性たちが、統一教会の説く神、霊界を信じていても特別なことにならない。

祖先祭祀については、統一教会は寛容である。韓国プロテスタント教会は、祖先祭祀を偶像崇拜にあたるとして否定するが、統一教会は、先祖の霊を大切にすることは当然のこととして否定しない。また韓国における家祭は、

秋葉が指摘するように男性が行う儒教の祖先祭祀と女性が行う巫俗の儀礼という二重構造になっている〔秋葉，1955：97-102〕。日本人女性たちの統一教会の信仰は、巫俗に代わるものとしてとらえられる。祖先祭祀の儀礼への参加が、もともと男性に限られるという点においても葛藤は起こらない。女性は供物などの準備をするだけである<sup>20</sup>。

先祖を大事にするのは、うち（統一教会）ではいいこと。お嫁さんの証としてはいいこと。嫁としての役割を果たして「立派だー」といわれる。嫁のみせどころ。家族、親族が集まる時、お嫁さんの腕のみせどころ。そういうのを喜んでバリバリにやったら。……日本から来た嫁がこんなこともできるのかー（と）（Jさん）

祖先祭祀は、かつてより簡素化されたとはいえ、決められた形式通りに供物を準備するのは大変である。準備を手伝うことは、日本人の嫁として「腕のみせどころ」のよい機会としてとらえられている。

長男はソウル（に住んでいる）。お嫁さんがクリスチャンで、チェサ（祭祀）の時こない。（Eさん、1965年生まれ）

Eの夫は三男である。祭祀の準備は姑とEがする。本来、祭祀を行う責任は長男にあり、長男の嫁は率先して準備をすべき立場にあるが、妻がクリスチャンであることを理由に夫婦で祭祀に関わろうとしない<sup>21</sup>。統一教会よりもクリスチャンの嫁のほうが嫁姑の葛藤を引き起こしそうな気配である。

#### 4.3 韓国の宗教風土に溶け込む信仰

異端とされながらも統一教会は、韓国の宗教風土になじみやすい側面を持っている。韓国で生まれ出た宗教であるから、当然のことなのかもしれない。それだけに日本人女性たちは、自分の信仰に違和感をもつことなく暮らせる。



(統一教会の信仰が)日本なら形ばかりの信仰。こっちでは(一般の人が)内面的には教会の教えの神髄のような気がする。日本なら、教会の人と一般の人の差がありすぎる。日本なら、統一教会というと「変な人」(となる)。こっちなら普通。生活状況一緒、献身ないし、キョンベ(敬拝)もあるし。儀式、日本では聖酒飲んだり、ろうそくついたりしない。こっちでは秋夕(旧盆)に、夜12時に、ご飯(供物)準備して敬礼(する)。教会(統一教会)と一般の差がない。信仰が生活に浸透してないといけない。日本だと全然違う。チェサ(祭祀では)(夜)10時、12時に敬礼する。12時にしたくないが、これが精誠<sup>22</sup>なんだな(と思う)。山まで行って(もする)。(Pさん、1978年生まれ)

韓国の祖先祭祀は実施回数が多い。家で行う祭祀には、まず毎年4代前の祖先(父母、祖父母、曾祖父母、高祖父母)に対して、それぞれの命日の前夜半過ぎから行う「忌祭祀」がある。原則通りに行えば、これだけで年8回ある。さらに元旦や秋夕などの名節の朝に、4代すべての祖先に対して行う「茶礼」があり、5代以上の祖先に対しては年1回、山にある墓所の前で行う「時祭」がある[嶋, 1986]。やはり簡素化により、忌祭祀などは夫と妻あるいは世代で合祀し回数を減らす傾向にあるが、それでも日本と比べると多い。韓国において宗教儀礼は、日常と切り離されてあるのではない。日常の中にある。

統一教会の信者は、日曜の朝や月初め、統一教会の祝日などに、家庭でも「敬礼式」を行うことになっている。これは「真のご父母様」(教祖夫妻)に侍る気持ちを表す儀礼である<sup>23</sup>。Pの語りは、祖先祭祀と統一教会の儀礼を比較しての言葉である。もともと韓国の暮らしに宗教が溶け込んでいるために、統一教会の儀礼を行っても特別なことにならない。「教会と一般の差がない」だけ、韓国の暮らしは、統一教会の信者にとって居心地よいものとなる。

## 5 考察 宗教実践としての日常生活

宗教嫌い、無関心であった日本人女性たちが、なぜ統一教会に入信し、合同結婚式を受け入れ、韓国での結婚生活を続けていられるのが本稿の問題であった。この点を彼女たちの語りからいえることを述べたい。彼女たちは、入信前から漠然と神、霊界に関心をもっていた。統一教会の教えは、彼女たちの漠然とした神、霊界についての知識を整理し、体系づけてくれるものであり、納得できるものであった。その点において彼女たちは統一教会を嫌いだった宗教と同列にとらえず、統一教会が宗教とわかって脱会しなかった。統一教会の教えを内面化すれば、彼女たちは統一教会の世界観の中で生き、教えに従った行動をとる。合同結婚式を受け入れ、韓国での生活を続けていられるのは、そのためである。霊界を確信するから、死後は霊界の「天上天国」で暮らせるように、罪を清算すべく努力する。神を確信するから、神の創造目的にかなう「地上天国」の実現をめざして家庭生活を送る。日常生活は、実態としてみるならば、日本人女性が韓国人男性と結婚し、子どもを生み育てているにすぎない。しかし観念的にみるならば、それは罪の清算および「地上天国」建設という宗教実践である。宗教実践であるから、恋愛感情ぬきの結婚であっても構わないのであり、困難な状況も苦勞とならずに乗り越えていける<sup>24)</sup>。

彼女たちの宗教実践としての日常は、いわば修行である。Bは「心情的には出家のお坊さんと一緒。悟りをひらく、普通に生活していながら」と語っている。修行としての生活はしんどいのではないかと思うが、「しんどさ」を打ち消すだけの「よさ」を彼女たちは感じている。一つは、前述した韓国の風土に根付くスピリチュアリティである。彼女たちのスピリチュアリティを満たすものが韓国にはある。もう一つは、韓国の人々の「生き方」である。

教会の教えの通りに、普通に生きている人がいる。「為に生きる」人、原理講論の通り。難しい本を読まなくても、生き方が信仰している

人より、まっすぐ。み言葉の基準で生きている。それを思うと来てよかったかな(と思う)。(Pさん)

韓国の人々の暮らしには、儒教倫理が家族や生活の規範としてある。親を敬う気持ちや年長者への礼儀正しさは、日本とは比べようもない。韓国の人には「情の深さが違う」とも、彼女たちはよく口にする。情が深く、道理をわきまえた人々。しかもA郡のような田舎で、地位や名誉を求めることなく淡々と生きている。その姿を前にPはこのように感じるのであろう。Pは上記の語りの後に次のようにも語っている。

一所懸命生きないとダメ、とか韓国の人という。日本語でいうと堅苦しいけど。ヨルシミ、サラヤヘヨ。ご飯いっぱい食べて、仕事して、しあわせに、毎日笑ってたらいいんだよ(と)。……日本にいと、正しく生きるとか(人は面と向かって)いわない。(日本の生活は)楽は楽なんだけど。

韓国暮らしに「しんどさ」はあっても、それに勝るもの、生きるうえで最も基本的なことは何かをPは韓国の人々に見出している。この思いはPに限らず、聞き取りに応じてくれた日本人女性たちが、みな感じていることと思われる。

## 6 おわりに

筆者が聞き取りをした日本人女性たちにとって、統一教会の教えと実践は、彼女たちのスピリチュアリティを満ちし、韓国での暮らしに意味と生きる勇気を与えるものであった。この点だけでいえば、彼女たちにとって、信仰は「よい」ものである。しかし逆の面もある。統一教会は、「原理」に出会った者がそれを捨てることは、罪深いことであり、霊界で永遠に責め続けられると教える〔青春を返せ裁判(東京)原告団・弁護団, 2000: 67-

90】神、霊界、先祖は、恐怖の対象、足枷となって、統一教会からの脱会を困難にさせる。彼女たちへの聞き取りでは、「恐怖」が語られることはなかったけれども、神、霊界、先祖への信仰は、両面合わせもつことを注意する必要があるだろう。

また、彼女たちの神や霊界への関心や、韓国の宗教風土について「スピリチュアリティ」の語を使うには、議論が不足している点もある。宗教嫌い、無関心であった女性たちが統一教会の信者になったことを理解する手がかりとしてわかりやすいとの理由で用いた。

本稿は、通常ならば理解しがたい合同結婚式と結婚生活の継続を理解しようとする試みであった。統一教会や合同結婚式を肯定する意図はないけれども、現役信者の語りをを用いる以上、全体としてみると肯定的と判断される部分があるかもしれない。この点は現役信者を調査する限り、つきまとう問題である。繰り返しになるが、筆者はあくまで日本人女性たちの合同結婚式の受容と結婚生活の継続の過程を少しでも明らかにしたいだけである。

調査地滞在中も夕方に聞き取りを終え、一人で宿に戻る時、いつも複雑な気持ちになる。日本人女性たちの現在の生活は、彼女たちにとっては自分で選び取ったものであり、納得のうえである。けれども彼女たちにも日本に親がいる。娘の選択を許している親もあるが、やはり今なお反対している親もある。彼女たちが選び取った韓国暮らしの裏に、娘の身を案じ、苦しむ親がいる。聞き取りをした日本人女性たちは、親と連絡は取り合い、一時帰国もしているが、親御さんの気持ちを思うと、調査など不謹慎な行為なのではないかと思う。でも日本人女性たちの選択を否定する気持ちにもなれないし、調査をやめる気持ちにもなれない。これからも自問自答しながら調査を続けていくことになりそうである。

#### 注

- 1) 韓国農村の高齢者への聞き取り調査で、韓国の大学に勤める知人に案内してもらい、ある農村を訪れた。その村で年配の女性から「うちに日本人がいるからおいで」と声をかけられ、行ってみると日本人女性がいた。立ち話をした程度だが、合同結婚式で結婚したと話してくれた。

- 2) 2006年2月5日~21日に行った調査で得た情報である。韓国や日本の統計をみても、これに近い数の日本人女性が渡韓していることがわかる。[中西, 2004, 2005] 参照。2005年9月9日の産経新聞には「在韓日本人、10年で倍増 半数統一教会関係者か」という記事もある。
- 3) 塩谷[1986]は、3日間の修練会に一受講生として参加した体験に基づくと、被調査者は、「退転者がほとんど」とある。
- 4) 語りは、現時点における過去の回想であるから、彼女たちの語りをそのまま受け取るとは注意する必要がある。ただ、およそ若者は宗教に無縁であり、関心をもたない点を考えると、「宗教嫌い」、宗教と無縁だった様子を語る言葉は、そのまま受け取っても問題ないと思われる。
- 5) 筆者の韓国での調査も、彼女たちに言わせれば「先祖の功勞で来る。押し出されて来ている」となる。
- 6) ここで用いるデータは、2001年9月10日~20日、02年3月18日~25日、03年1月30日~2月14日、04年8月30日~9月15日、05年8月22日~31日、同9月7日~13日に行った聞き取り調査および参与観察から得られたものである。聞き取りでは、録音せずにノートに書き取った。語りの中の( )は、筆者による補足である。
- 7) 「献身」は、学業、仕事を辞めて統一教会の活動に専念すること。
- 8) 24人の結婚年は、1988年1人、92年5人、95年11人、97年1人、98年2人、99年2人、2001年2人である。
- 9) iBDは「It's a Beautiful Day」の略。1980年設立。現在はiBDとしての活動は行っていない。
- 10) 統一教会は勧誘する時、統一教会であることも宗教であることも隠して勧誘する。ある程度、教義を学習させたくて統一教会と明かす。
- 11) 加藤清正を主祭神とする「加藤神社」がある(<http://www.kato-jinja.or.jp/>)。
- 12) 韓国の統一教会は、『本郷人』という在韓日本人信者を対象としたタブロイド版新聞を毎月発行している。「本郷互助会 今月の援助対象者」という欄があり、困難な状況にある信者の様子や援助内容が掲載されている。2006年2月号には、「義兄が夫の名義で携帯を買い、膨大な使用料金を払わないでいたため、夫は信用不良者となりました。そのため就職もできず、夫自身も借金をつくり……」、「夫は心臓病のため、仕事をしておらず、生活保護を受けています」などの記事がみられる。
- 13) シオモニは韓国語で姑のこと。主体者は夫のこと。これは統一教会用語である。
- 14) 合同結婚式で結婚しても、全く礼拝に出席しない夫もいる。農家では日曜日でも農作業がある。夫や夫の家族に理解がないと、妻は礼拝に行かせてもらえない。農家ではないが、夫から暴力を受けることがあるという女性(Uさん、1950

- 年生まれ)は、夫が嫌がるから教会には行けないと語っていた。必然的に、筆者が大変な暮らしの女性と会う機会はなく、とりあえず無難に生活している女性たちにしか話を聞けないことになる。
- 15) 日本やその他の国の信者は、韓国に布教担当地域「任地」を与えられている。来韓すると彼らは「任地」の統一教会に宿泊する。韓国語ができるとは限らず、布教の際の付き添いと通訳、食事の支度などは日本人女性が世話をする。
- 16) ピョン・チグ編 [2002] には 11 教団が載っている。また、キム・ヨンム、キム・グチョル [2004] には「韓国における主要異端系譜図」が載っている。
- 17) 脱会した元幹部による批判本も出ている。イ [1999]、朴 [2000] などが詳しい。
- 18) 文鮮明統一教集団 糾弾声明書は、2004 年 1 月 11 日「週刊教会連合新聞」、「統一教関連の団体および企業体」は、同年 1 月 14 日「キリスト新聞」である。統一教会の韓国での通称は「統一教」である。
- 19) ホットサンドイッチのチェーン店。チェーン店加盟にはクリスチャンであることが求められる (<http://www.isaac-toast.co.kr/>)。
- 20) 最近は変化もみられ、家によっては女性が儀礼の場に立ち会うこともあるようである。その場合でも女性は祖先に対して敬拝をしない。「女性はチョル(拝むこと)しない。食事作って並べる」(E さん)という語りもみられた。
- 21) 長男が参加しないのは信じがたく、E に参加者を確認したが、E の夫、夫の次兄、姑と E であった。夫の次兄は独身のため、祭祀の準備は姑と E がする。
- 22) 「真心、誠意」という意味の韓国語。統一教会の信者は「神の前に誠を尽くす」の意味で使っている。
- 23) 教祖夫妻の写真を置いた祭壇を設け、ろうそくを灯して行われる。敬礼の仕方は祖先祭祀の時に行われる敬拝とほぼ同じである [伝統編纂委員会, 1987: 35-53]。
- 24) 統一教会の結婚は恋愛感情をとまなわない結婚であるが、かつて日本でも家制度のもとに親同士が決めた結婚があった。統一教会の結婚と一緒ににはできないが、個人の意志よりも集団の目標が優先されるという点は似ている。

## 文献

- 秋葉隆, 1955, 『朝鮮巫俗の現地研究』東京: 名著出版(復刻版)。
- 朴二哲, 2000, 『奪われた 30 年、失った 30 年 文鮮明統一教集団の正体を暴く』ソウル: 図書出版真理と生命社。
- 伝統編纂委員会, 1987, 『伝統』東京: 光言社。
- イ・デボク, 1999, 『統一教会原理批判と文鮮明の正体』ソウル: キリスト教異端問題研究所, クンセン出版社。
- 伊藤雅之, 2003, 『現代社会とスピリチュアリティ』広島: 溪水社。

- キム・ヨンム, キム・グチョル, 2004, 『異端と似而非』ソウル: アガペー社.
- 中西尋子, 2004, 「『地上天国』建設のための結婚 ある新宗教教団における集団結婚式参加者への聞き取り調査から」『宗教と社会』10: 47-69.
- 中西尋子, 2005, 「在韓日本人妻の人数 『海外在留邦人数調査統計』から」『消費者法ニュース』64: 181-184.
- 中西尋子, 2006 (予定), 「『女性性』の回復 ある新宗教教団における集団結婚式参加者たちの結婚と結婚生活」『ソシオロジ』156.
- ピョン・チツグ編, 2002, 『自称韓国の再臨主たち』ソウル: 現代宗教国際宗教問題研究所.
- 櫻井義秀, 2000, 「宗教集団調査法の新局面」研究代表者櫻井義秀『教団研究の今日的課題』(平成10、11年度科学研究費補助金研究報告書): 2-8.
- 櫻井義秀, 2002a, 「『宗教被害』と人権・自己決定権をめぐる問題 統一教会関連の裁判を中心に」『現代社会学研究』15: 63-81.
- 櫻井義秀, 2002b, 「日本における『カルト』問題の形態 宗教社会学的『カルト』研究の課題」南山宗教文化研究所編『宗教と社会問題のあいだ カルト問題を考える』東京: 青弓社: 100-118.
- 櫻井義秀, 2003a, 「宗教/ジェンダー・イデオロギーによる『家族』の構築 統一教会女性信者を事例に」『宗教と社会』9: 43-65.
- 櫻井義秀, 2003b, 「日本のカルト問題 韓国に嫁いだ日本統一教会女性信者の事例」韓国日本近代學會『日本近代學研究』7: 103-118.
- 世界基督教統一神霊協會, 1993, 『原理講論・普及版』東京: 光言社.
- 嶋陸奥彦, 1986, 「祖先祭祀」伊藤亜人、大村益夫、梶村秀樹、武田幸男監修『朝鮮を知る事典』東京: 平凡社, 256-257.
- 青春を返せ裁判(東京)原告団・弁護団, 2000, 『青春を奪った統一協会 青春を返せ裁判(東京)の記録』東京: 緑風出版.
- 塩谷政憲, 1986, 「宗教運動への献身をめぐる家族からの離反」森岡清美編『近代における「家」の変質と宗教』東京: 新地書房, 153-174.
- 統一思想研究院, 1998, 『李相軒先生が霊界から送ったメッセージ 霊界の実相と地上生活』東京: 光言社.

#### 資料

- 世界基督教統一神霊協會, 1966, 『原理講論』ソウル: 成和社(韓国語、非売品).
- 世界基督教統一神霊協會, 1998, 『地上生活と霊界』東京: 光言社.

## Faith in God and the spiritual world: Japanese brides who wedded at the Unification Church's mass weddings

Hiroko Nakanishi\*

### Abstract

This document examines, based on interviews with pertinent women, why Japanese women who married Korean men in the mass weddings held by the Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity (i.e., the Unification Church) and live in rural South Korea agreed to be married in the mass ceremonies and how they are able to continue with those married lives.

Interviews with the women show that they previously disliked or had no interest in religion, but were interested in spiritual issues such as God and the spiritual world. It is considered that women with such attitudes towards religion joined the Unification Church because its stance and practices regarding God and the spiritual world satisfied their spirituality. Those that related to and internalised the Unification Church's teachings were able to live their lives within the church's world view, and act in accordance with its teachings. The church's goal and its followers' ideal is to give birth to "Children of God" and create the heaven on Earth which it is God's will to create, to be absolved of sin and be rewarded with everlasting life in the spiritual world-heaven-after death in the material world.

Unification Church theology is that marrying Korean men and bearing their children is a requirement for achieving the heaven on Earth, and that by serving one's husband and his family one is absolved of sin. Thus, it is inferred that the subjects of this study joined the Unification Church, agreed to be married in the mass ceremonies and are able to carry on with their married lives because the church's teachings and practices satisfy their spirituality.

**Key words:** God, the spiritual world, spirituality, the Unification Church

\*Kwansei Gakuin University